

九月二四日 何故だか休日

午後東大安田講堂で学会の講演会。気楽に構えていたらチョット雰囲気は怪しくて、東大の正門入って直線状に安田講堂に入つてゆくと何だか身構えてしまうのだった。原広司さんが大チョンボの遅刻して、トリだった筈の内田祥哉先生が私の前の講演を受け持っていた。原さんの建築は年々大仰なモノになってチョット時代錯誤気味のように思うのだが、こういう取りこぼしがあるのが救いだ。遅れてやってきて「今日は何なんだ」だって。しかし安田講堂は話す側にとつては見事な空間であった。扇形の平面と二階のせり出しの感じ、キチンとした緊張感があつて、マアこれが大学が大学らしかった時代の中心的空間であり、場所であつた事が良く理解できた。学長あるいは文部大臣でもここで一度演説した人間は病みつきになつただろうと思われる。演者への集中度が凄いのだ。天井のデザインも平面形をそのまま写したもので抑制されていて良い。ディテールの装飾も銀行なんかのゴテゴテがなくて良い。塔状になつた外見の垂直性と比して内部は水平性が勝つていて、それが抑制された力の表現になつている。東大は見込みのある学生に在校中にここで一度演説させたら良い。学生はたちどころに安田講堂の意味すなわち東大の意味を理解するだろう。

これに比べると大隈講堂はやつぱり、何だか女々しいよね。長谷川堯のメスの視覚だったか、神殿と獄舎であつたか、アノ直観

の初めの一步は正しい。大隈講堂は講演していてもこれ程の集中力を感じられない。空間の構造が弱くできている。天井や個々のディテールも妙にしなだれかかってくる様などころがある。根本的には東大のキャンパスには正門から安田講堂への軸があるのだが早稲田のキャンパスには軸がない。全然ない。大隈講堂はいきなり町の片隅にポツンと建っている。創設者の精神が健在である頃はそれで良いが、創設の精神が失われてくるとそれではたちゆかない。そこで建築の役割が生まれる。大学のシンボルは創設の精神の収蔵庫なのだ。だからキチンとしていなくてはならない。安田講堂は前の庭が妙に小市民的な公園風になっているのが傷だが、まだキチンとしている。

早稲田キャンパスは風前の灯火である。建築の価値を不動産の価値としかたらえられぬ人間にキャンパスを任せているから、早稲田は沈んでゆくのだ。はからずも、安田講堂を体験して早稲田の弱点を良く知らされた。晩飯は神楽坂で鈴木博之と。四方山話に花が咲いた。鈴木博之の良いところは人格がまさに安田講堂的であるところだ。安田講堂に足がはえて歩いていようなモンだな。こういう人物は早稲田には居ない。

九月二五日

朝から晩まで世田谷で打ち合わせ、およびスケッチ。三階と地下を登り降りして暮らす。坂口に描かせていたホームレスハウスのドローイングが出来上つた。仲々良く出来ていてアイツはこういう事で飯喰つていけるのじゃないかと思わせるくらいだ。

夕方十四人のスタッフに全員プロダクツのスケッチを課す。一時間半で椅子のデザイン照明のデザインを提出せよというもの。部品を少量発注してそれを組み合わせることだけで多様な姿の製

品ができるなんて夢の又夢だな。自転車のデザインもいつかやってみたい。